

一般国道276号 岩内共和道路 ワークショップについて

大江 祐一¹・干場 照平²・高野 眞司³

^{1,2,3}北海道開発局 小樽開発建設部 道路計画課 (〒047-8555 北海道小樽市潮見台1-15-5)

北海道開発局小樽開発建設部では、一般国道276号岩内共和道路において、地域特性を活かし、安全かつ機能的で、自然環境にも配慮した道路整備を、地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む「協働型インフラ・マネジメント」に基づき検討・推進しているところである。

その検討にあたり、地域住民や物流・観光事業者へ事業に関する情報提供、ワークショップ形式で意見交換等を行い、設計・管理に反映している。本文はその内容を紹介するものである。

キーワード 連携・協働, 観光・景観

1. はじめに

北海道開発局では主要施策の進め方の一環として、新たな北海道イニシアティブを推進している。

これは、北海道の優れた資源・特性を活かした全国画一ではないローカルスタンダード導入により、北海道固有の課題に対する独自の取組（北海道スタンダード）や、我が国経済社会の変化に応じた制度設計のフロンティアとなる、北海道の特性を活かした先駆的・実験的取組等を積極的に推進するものである。

小樽開発建設部では、北海道イニシアティブの推進として、一般国道276号岩内共和道路（以下、岩内共和道路）において、地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む「協働型インフラ・マネジメント」を展開している。

本報告では、岩内共和道路における「協働型インフラ・マネジメント」を進めるために実施している、地域住民や物流・観光事業者へ事業に関する情報提供や、ワークショップ形式での意見交換等の内容を報告するものである。

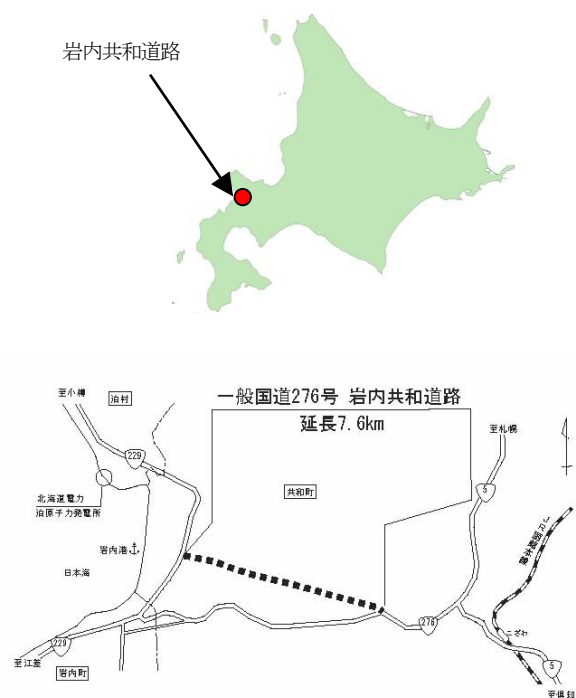
2. 一般国道276号岩内共和道路について

事業概要

一般国道276号は江差町を起点とし、岩内町、喜茂別町及び伊達市を通過し苫小牧市へ至る幹線道路である。このうち岩内共和道路は岩内町と共和町の区間において、交通安全の向上、交通混雑の解消及び泊原子力発電所での災害時における緊急避難路の確保等に資する道路とし

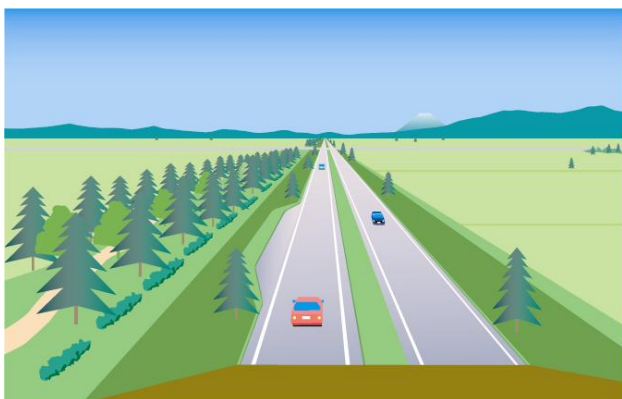
て事業を実施している。

事業区間は岩内郡共和町梨野舞納（りやむない）から岩内郡共和町国富（くにとみ）までの約7.6km、道路規格は3種2級2車線の一般国道である。（図—1）



図—1 岩内共和道路概略図

また、冬季には日本海沿岸特有の地吹雪による視程障害対策として防雪林の整備、交通安全対策として分離構造の採用、景観に配慮した視線誘導施設及び景観資源の活用に配慮した駐車場の検討を行っている。（図－２）



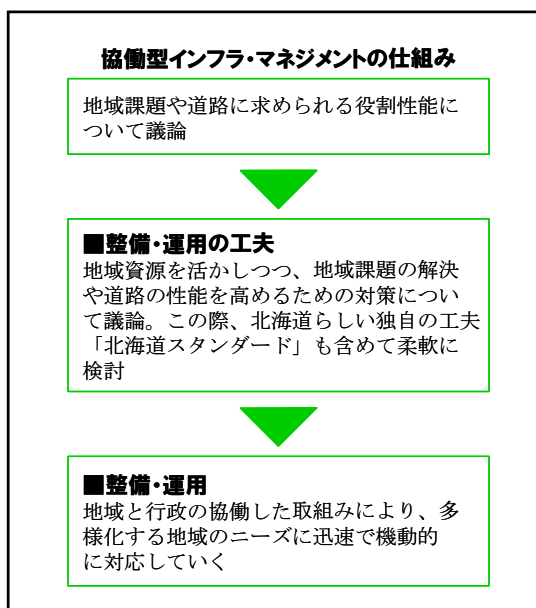
図－２ 岩内共和道路イメージ図

3. 協働型インフラ・マネジメントについて

協働型インフラ・マネジメントの概要

協働型インフラ・マネジメントとは、地域と行政が協働してインフラ整備や利活用に取り組む仕組みであり、様々な場面で協働しながら個々の地域の実情に応じた「使いやすい道路」の整備・運用を目指すものである。（図－３）

これまでの道づくりとの相違点は、必要とされる道路の作り方、道路の使い方や管理の仕方について、その最善の方法を地域と共に話し合い、道路の役割から見て、何が足りないか、何が貢献できるか、地域は何をすべきかを議論する。



図－３ 協働型インフラ・マネジメントの仕組み

また、行動するのは道路管理者だけでなく、ある時は協働で、ある時は地域やユーザーが自ら行うことも考える。そして、地域特性に合わせ、地域の個性を伸ばし、よりよい地域づくりに貢献する道路のデザインと運用方法を考える点である。

この協働型インフラマネジメントを推進するために、地域住民や物流・観光事業者へ事業に関する情報提供や、道路管理者と地域やユーザーとの対話の場としてワークショップ形式を採用した。

4. 岩内共和道路ワークショップについて

(1) ワークショップの内容

ワークショップは、地域資源の発掘や課題を共有し、パートナーシップを構築することでよりよい道路構造や運用を検討していくものであり、年１～２回、半日程度の日程で地域の会館等を利用して開催している。

ワークショップの進行は、事業の進捗状況や議論の内容について説明した後、意見交換を行う形で進めた。

（写真－１、２）



写真－１ パネルによる説明状況



写真－２ 意見交換の状況

議題となる検討テーマについては、防雪林、駐車場、視線誘導施設等を題材とし、検討テーマ毎に、１回目目録で課題提起・フリーディスカッション、２回目目録で技術的検

討・評価、3回目で決定というフローに基づき議論を進めていく。(図-4)

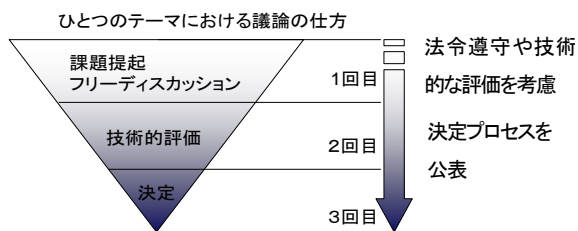


図-4 議論のプロセス

現在までに行った意見交換により、防雪林の育成、景観資源を活用した駐車場の検討を行っている。

(2) ワークショップメンバー

岩内共和道路ワークショップへの参加メンバーは、北海道の地域特性である、積雪寒冷地・観光資源・シーニックバイウェイといった視点を重視し、道路利用者の視点から道路の性能を評価、北海道ならではのデザインの工夫を話し合いできるメンバーとした。(表-1)

その構成は、地域の道路利用者として、生活者の視点から地域団体より2名、物流の視点から運輸会社より2名、観光の視点から地元の観光施設及び活動団体より2名参加していただいた。

アドバイザーとして、道づくりに詳しい北海道内の学識経験者2名、防雪林等の樹木の機能・育成に詳しい樹木の専門家1名、周辺地域で活動する写真家1名に参加していただいた。

また、行政側は北海道開発局小樽開発建設部、岩内町、共和町として、担当者を複数名配置し、人事異動による人脈が途切れることの無いよう配慮した。

表-1 ワークショップメンバー

地域の利用者	地域の女性をメインとした活動団体
	地域の環境を考える会
	物流事業者
	バス事業者
	美術館学芸員
アドバイザー	地域の活動団体
	道づくりに関する学識経験者
	樹木の専門家
行政	写真家
	北海道開発局小樽開発建設部
	岩内町
	共和町

(3) 地域住民への情報提供

地域協働を行う上で重要となる、地域住民への情報提供と対話の場を作るためワークショップメンバーを中心に植樹会などの各種の取り組みを行った。

これらの取り組みはワークショップのメンバーだけではなく、広く岩内共和道路事業を知ってもらうことを目的としているため、各種の取り組みに先立ち、事業についての説明を行った。(写真-3)



写真-3 岩内共和道路事業の説明状況

5. 主な取り組み状況について

(1) 防雪機能を目的とした防雪林の植樹

自然環境の大切さ、岩内共和道路及び防雪林の機能の理解、これらへ愛着をもってもらうことをねらいとして、2006年に防雪林の体験植樹を、翌2007年には種の採取と植付けを行った。

取り組みの概要は次のとおりである。

○2006年

実施項目：苗木の植樹(写真-4)

参加者：北海道立共和高等学校の生徒先生及び地元住民23名



写真-4 防雪林用苗木の植樹

○2007年

実施項目：樹木の種の採取と植付け（写真一5）

参加者：共和町立中央幼児センター園児及び先生37名



写真一5 防雪林用樹木の種の採取

実施項目：苗木の植樹（写真一6）

参加者：はまなす幼児センター園児、岩内・共和両町の
住民、岩内・共和町VSP団体60名



写真一6 防雪林用樹木の植樹

このうち 2006年の取り組みの中で体験植樹の参加者へアンケート調査を行い、参加者全員が継続を希望するという結果を得た。

また、次世代への継承を考慮し参加者に幼稚園児を組み入れた結果、「植樹に関わることができ、町に住んでいるので、ずっと感心を持っていける」との意見も得た。

防雪林の体験植樹及び種採取は参加者に好評であり、また、幅広い年齢層で行うことができ、地域協働を実践する上でパートナーシップづくりの手法として有効であると考えられる。

(2) 景観資源の活用に配慮した駐車場の検討

岩内共和道路のある一般国道276号はシーニックバイウェイ北海道の支笏洞爺ニセコルートにニセコ羊蹄エリアにある。

周辺には田園風景が広がり、羊蹄山やニセコ連峰などが見渡せる。その景観資源を活かすべく、景観資源の発掘とその活用方法について検討した。

検討手順は、2006年3月のワークショップにおいて、地図上で景観資源の確認と地域の特性を反映した利用者ニーズ及び使い方を確認し、2006年9月に地元写真家と共に現地を歩き（写真一7）、駐車場の設置候補地として田園風景とニセコ連峰、田園風景と丘陵地帯及び夕日の眺望が良好な箇所の3箇所が選定された。（図一5）



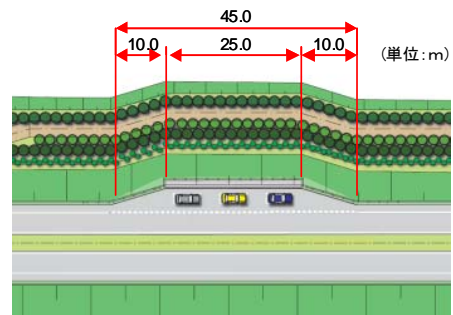
写真一7 景観資源の確認状況



図一5 景観資源を活用した駐車場候補地

2009年3月のワークショップの議論では、駐車場の使われ方、利用者ニーズの把握をワークショップメンバーの多方面からの意見を取り入れた上で、駐車場の設置位置、箇所数、規模について検討した。

議論の結果、設置位置については候補地のうち比較的盛土高さが高く良好な眺望が期待できる箇所に上下車線の両側、規模については大型車の停車を考慮せず、乗用車のみ数台程度の小さな規模とすることとして、技術的評価を行うこととした。（図一6）



図一6 駐車場設計図

技術的評価の検討では、幅員・延長等の具体的な構造等について小樽開発建設部にて関係機関との協議及び設計を経て、2009年8月のワークショップにおいて経過を報告、ワークショップとして方針を決定した。

この検討の中で、駐車場での簡単な地域の情報提供も必要という意見も出された。

議論の結果、提供すべき地域情報、方式、更新の頻度及び方法等、さらに景観への配慮等総合的に勘案し小型の看板形式とすることで基本形式を決定した。

この情報看板形式・内容を検討するにあたり、簡易な模型を作成し、ワークショップメンバーがイメージがつかみやすいよう工夫を行った。(写真-8)



写真-8 情報看板の検討内容

6. まとめ

2006年から続いている岩内共和道路ワークショップは5年にわたり9回開催してきたが、この間、本文で紹介した内容について議論・活動を行い、地域の方々との対話を通じて、パートナーシップを形成し、いろいろな意見を取り入れることが出来た。

ワークショップでは、毎回活発で自由な議論がなされ、駐車場の議論では、地域の方々や物流・バス事業者からは、使われ方などについて実態に即した意見をいただき、構造の検討に非常に役立った。

このように、道路整備におけるアカウンタビリティの手法として、ワークショップによる情報提供や意見交換は有効であり、事業推進するうえで非常に役立っている。

今後も地域の声、様々な立場の声を生かせる道路整備、道路の利活用を目指し、引き続き岩内共和道路ワークショップにて、使いやすい道路として岩内共和道路の完成を目指していきたい。

謝辞：岩内共和道路ワークショップに参加し、ご協力していただいているメンバーに感謝をいたします。